

宗門先師に聴く

南 條 孝 仁

(大阪府興覚寺住職)

『人類の滅亡を予言する妙法蓮華經』

—謗法を除去する「利他」の捨身行—

⑤資本主義が仏教を支配する時代（明治時代）

一、定着しなかった天台大師の法華經重視
天台大師は五時八教を立てて、膨大な仏典を整理されたが、中国ではこの法華經重視の説は定着せず、八世紀後半即ち遣唐使として最澄、空海が中国に渡って仏教を学んだ頃は真言密教が流行し、天台学を学んだ最澄ですら、この密教も併せて取り入れて帰国した。

二、仏教を標榜する教団は釈尊の仏法と正反対
比叡山から出た鎌倉仏教の三人の開祖（法然、親鸞、道元）も当然妙法蓮華經を読んでいたはずですが、最後に出て来た日蓮聖人のみが、妙法蓮華經に南無するという意味での、法華經の行者となりました。また千三百年の日本佛教史を社会経済的にとらえると、

- ①貴族のための貴族による輸入仏教（奈良時代）
- ②武士・農民への仏教の浸透（平安時代）
- ③貴族仏教と武士・農民の仏教の分裂と血みどろの闘争の時代（鎌倉、室町時代）
- ④武家政治による仏教の支配の時代（戦国、徳川時代）

法が全く隠没し、始めの五百年に地涌の菩薩が迫害、法難をしのいで正法を弘める（白法隠没）であります。ところが、この予言には二つの難点があります。

一つは、この予言の起点となるべき仏滅の年代が、北伝仏教（チベットから中国）では仏滅を紀元前十世纪頃とします。南伝では紀元前五世纪とします。この五百年のズレです。二つ目は大乗非仏説です。近代ヨーロッパ仏教学では、法華經も含めて大乗經典の成立は紀元前一五世纪と証明されていますので、釈尊の直接の金口ではないと言わざるを得ません。

この二大難点によって仏教の成立の土台が揺らぎ、その普遍性が崩壊してしまっています。何故なら、宗教が科学とは別に存在し得る決定的根拠は、宗教的予言の真実性にあるからです。科学もまた、科学的予測はしますが、既知の知識を積み上げて、その延長線上で予測します。しかし宗教的予言、或いは真理の認識方法は、優れて神秘的なところがあります。しかし現在の人類の社会経済組織が、この宗教的神秘力を自動的に破壊するよう機能しているため、眞の宗教者、宗教的天才は極めて

まれな存在となってしまったのです。その代りといつては何ですが、ニセモノの宗教者が無数に現われて、人々をだまし、神仏をもべてんにかけ、詐欺商法、靈感商法とも言えるものまで出現し、人類の自滅の過程を促進する要素となり下っています。

三、北伝仏教の大乗教典の予言は完成しなかったこの程度の差こそあれ、私達も重大に関わる詐欺的宗教の横行は、実は人類全体が、この地球をまるごとペテンにかけようとしていることの、自然・必然的な表現形態ではないでしょうか。

釈尊は、仏滅後二千年で釈尊の仏法は生命を終えると予言されました。その時、上行菩薩をリーダーとする地涌の菩薩が現われて、妙法蓮華經を説き、弘めるとしました。そして我国でも末法の意識が強くなつた鎌倉時代に、日蓮聖人が妙法蓮華經の広宣流布の活動を起され、日像上人等に受けつがれた教線の拡張は、大いに成果を上げましたが、宗祖滅後二百五十年、京都における、天台宗による日蓮宗つぶしの天文法乱が起こり、惜しくも法華經の広宣流布の芽は完全に摘み取られてしまいまし

たことは、周知の通りであり、この史実で見ると、北伝佛教の枠組で立てられた、末法五百年のうちに、妙法蓮華經が世界に弘宣するという予言は成就しなかつたという事は否めません。

四、史実と合致している南伝佛教の仏滅年代

日蓮聖人は、この南伝と北伝のこの五百年のズレに全くお気付きではないよう一応は見えますが、文永十一年十二月身延で書き顕された御本尊（千葉県保田妙本寺藏）の讃文に、「此大本尊 或知不弘之 或不知之 我慈父 以仏智隱留之 為末代殘之 後五百歲之時 上行菩薩出現於世 始弘宣之」。即ち日蓮聖人滅後五百年に、上行菩薩が出現して、この大本尊を弘宣するであろうとありますから、日蓮聖人は「日蓮上行菩薩その人にあらねども」とか、また「日蓮上行にさきがけて」等、御遺文の隨所に見受けられることとも考え合せますと、五百年のズレを洞察されていましたとも充分考えられます。

五、久遠本仏の反逆している人類

この末法の時代に弘宣されるべき妙法蓮華經はどのようなことを説いているのでしょうか。山下民城著『法華華

經は大予言の書だった』より、「その我執と競争意識の最も発達したのが人間である」「人間はどうだ。個人的にも集団的にも、やたらに同じ人間を殺してきた」「なぜ人間はこんなに狂暴になったのか」「自然の摂理を忘れた貧弱な自己保存欲、物欲、独占欲、権勢欲等々、またそれから派生する憎しみ、怒り、ねたみ等が、人間を狂わせてしまったのである」（一三〇四頁）「これは明らかに宇宙の大生命即ち久遠の本仏への反逆である。だからこのままの状態が続ければ、地球の破滅は必至である。従って人類も滅亡する」

妙法蓮華經は、明確に人類は宇宙の大生命たる久遠の本仏に反逆しているということを指摘し批判しているお經であります。

六、人類にとって耳の痛い法華經

この法華經の本当の内容は、人類にとって大変に聞きづらい、耳の痛いものであります。それ故に、釈尊在世には五千の増上慢が退席せざるを得ませんでした。このことを宗祖は『御義口伝』に「經にはその数有五千とあれども、日本国に四十九億九万四千八百二十八人と見え

たり。在世には五千人佛の座を立てり。今末法にては日本國の一切衆生悉く日蓮が所座を立てり」（定二六一八頁）。四十九億は、今の全世界の人口と付合します。面白い一致です。日本はおろか世界中の全ての人間が、妙法蓮華經を聞きたくない、というのが本心でしよう。これが末法の本当の状況なのです。そのことを日蓮聖人は示唆されているのです。

七、人類の地獄墮ちを強調する法華經
日蓮聖人系統の宗派は、謗法の認識を信仰の最優先とします。日蓮宗派の特徴です。謗法即ち法をそしるということの中身は何を意味しているのでしょうか。

それは先に引用した山下氏の言われるところの「人類は久遠の本仏に反逆している」ということ、別の言葉でより明確にすれば、「人類が、自己の生命の久遠さをさとらず、人生の究極的目的を忘れ地球を占領し、侵略し、地球を奴隸化している」ということです。

妙法蓮華經は「存知の通り、有情無情、宇宙の全存在の成仏を説くお經であるとされています。がしかし、その正法にそむくものは地獄に墮ちる、ということも断固

として強調しているのです。これはまさに、宇宙の全生存は成仏するが、自らの貪欲によつて、地球の全衆生を奴隸化している人類だけは、仏種を絶ち、地獄に墮ちかねないよ、という意味でしょう。だからこそ法華經は、全仏典のエッセンスであり、その中の最高の教えであり、最要をなすものであると言われるのです。

日蓮聖人は『顕立正意抄』の中に「未来を案ざるに、日本國上下万民阿鼻大城に墮せんこと大地を的となしがごとし」（定八四一頁）と人類の未来を洞察されていました。だからこそ、宗祖は人類救済の使者としての使命感を正法流布に身血をかたむけられたのでしょう。

『佐渡御書』に「日蓮も又かく責めらるるも先業（謗法）なきにあらず。」（定六一四頁）「日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば……」（定六一五頁）とお書きのように、前世から的人類が積み上げてきた三毒に起因する久遠本仏への反逆の罪を懲悔しなくてはなりません。地球破壊と地球の全衆生への奴隸化の罪をわびねばなりません。それを大乗仏教では、「十方分身三世の諸仏への懲悔」としているのではないでしょうか。

八、日本人が、そして自分が一番悪い衆生である

法華經の縁深き國・人は、最も悪い心をもった國民、

即ち日本人、そして自分であります。最も救われねばならない國、人であります。それが法華經の対告衆です。

仏法東漸の予言は、日本人が仏の真先のターゲットであつたのではないでしょうか。本当の悪人正機とは、このことのように思います。

法華經から、時代の要請に合致した眞の宗学を創造しなければなりません。それが時代性をそなえた「法華經の行者」私達であります。教學は救濟の理論であり、私達の行動原理であるからです。

宗祖大聖人の信仰上の上行菩薩の自覺は当然のことながら、南伝による末法始めの五百歳は二千二十年頃迄であります。地涌の菩薩の再出現を祈ろうではありませんか。私達地涌の末座にあるものは、自行化他の両行為をいかに具体化するかということを真剣に考え、寺の中と寺の外の行動を明確にすることが急務であります。

久遠実成と二乗作仏の二箇の大事も、私達自身の問題としてとらえ、久遠本仏の意図と慈悲に反逆することとな

く、如來の秘密神通之力を明らかに聞かねばなりますまい。